

シベリア幽囚の歲月

東京都 嶋崎 武男

昭和十七年三月、私は召集令状を受け取り、相模原電信第一連隊（旧中野電信隊）に入隊した。年若い父は、東京では別天地と言われた山深い奥地の、私の出生地である檜原村から、はるばる宮門まで見送ってくれた。すでに長兄を戦場に送り、続いて弟の私を送りだすことになった。これからどのように展開されるかわからない今後を考えると、あの山里へさびしく帰ってゆくであろう父の心情を思い、万感胸に迫った。

この年十二月、私は関東軍第四三七〇部隊（関東軍第一装甲列車隊）に転属を命じられ、旧満州国（現中国東北部）ハルビンに到着した。装甲列車は全車両が榴弾砲、加農砲、機関砲、高射砲、重機関銃、軽機関銃などの各種火器の装備で固められた砲兵車、歩兵車、鉄道車、無線車、司令車で編成された陸の軍艦だった。

我々の装甲列車は機動力を利用して満洲里、ハイラル、牡丹江など国境線主要基地を巡回して、その補強情報の収集に当たっていた。

この間、南方戦線の戦況はますます不利になっていた。無線車に乗って軍用無線機で各戦線の戦況を私は耳にできた。それは平時許されるべき事ではなかった。だがその頃関東軍の兵員、武器弾薬は、ほとんど南方戦線、沖繩戦線に転戦させられていた。昭和二十年六月、米空軍のB 29が大連沖の空母から発艦して関東軍司令部（新京）を爆撃した。当時関東軍司令部としては思いもよらぬ事であったので、新京周辺の上空防衛の備えは皆無であった。関東軍司令部は急ぎ第一装甲列車隊に新京周辺の防空に任せよとの命令が出され、国境線にいた列車隊は南下を開始した。

日本の南方戦線の戦況はますます不利となり、戦線は刻々と日本の国に近づきつつあった。

この時点になりソ連は日本の戦況不利を見透かして、日本との不可侵条約を一方的に無視してソ満国境から怒濤のごとく侵入してきた。国際法を無視した、あま

りにも卑劣なソ連の行動であった。

このとき国境線はすでに主力は沖繩戦線に移動し、兵員弾薬の不足は優勢なソ連軍と戦火を交える状態になかった。日本軍はただ夜襲捨て身の斬り込み作戦しかなかった。日本軍はたちまちソ連軍に制圧され満州国はソ連軍に占領された。私の部隊は激動と混乱の中で命令は次々と変更された。将兵は対応にとまどい、その心情は揺れ動いた。

その頃にはすでに終戦の詔勅が放送されたことは、全満州の都市の満州国人や朝鮮人たちには知れ渡っていた。「日本は戦争に負けた、もう日本人の言う事を聞くことはない、今まで俺たちは日本人に虐げられていたんだ」街中にこんな声飛び交い、あちこちの日本人の家が襲撃されたとの噂が次々に伝えられた。また満州国の一部の軍人が反乱を起こした事も伝わってきた。我々はこのときハルビンまで南下していた。「たとえどのような事が起こっても今はただ戦争を終わらせることが天皇詔勅の本旨である」それが上官の命令であった。戦うこともできず在留邦人を保護する

こともできなかった無力の軍の無念さよりも、今は最も危険な外国となってしまった満州国に、それまで何の心配もなく在留していた日本人の不安と絶望は、筆舌に尽くせぬものだった。襲撃を受けてもこれに対抗する手段を失ってしまった在留邦人は、女性は皆断髪し顔に煤を塗って男装し暴行を逃れたが、略奪は防げなかった。

混乱の真っ只中であって武器を持ち出して防衛することもできなかった。もし戦って在留邦人を戦火にさらすことになる、より悲惨な現実となるのが目に見えていたからだ。しかし何人かの者は秘かに拳銃と弾薬を手にして脱走して行った。誰も止めなかった。また、一部では武器を持ち出し、軍用トラックに使乘して集団で脱走したという話も聞いた。けれども当時の混乱の状況から、それはあまりにも無謀に等しい事だった。これらの人はその後どうなっただろうか、それは突然の終戦という現実、その目標を失った日本陸軍の悲運な最後の姿であった。一方、ソ満国境最前線の山中では、いまだ終戦を知らず戦闘中であった。優勢

なソ連軍に囲まれた最前線に終戦を知らせる方法がなかったのだ。これらの将兵はソ連軍の砲火に追われて山中に立てこもり、弾薬は尽き果てても補給はなく、昼はタコ壺に隠れ夜は斬り込み戦のほか術はなく玉碎していった。

当時の情勢はいつでも暴動が起こるかかわからず、日本人への報復の危機をいっばいはらんでいた。しかし今激情に駆られる事は敵に慎まなければならない。すべての在留邦人がどんな運命になるかは目に見えていた。多くの在留邦人の今後のためには大事をひき起こしてはならないのだ。詔勅渙発の八月十五日の後九月二日、装甲列車隊長は万斛の涙を呑んで武装を解除する旨示達された。装甲列車隊は列車をはじめすべての武器をソ連軍に渡した。しかし、いかに弁解しようとも無条件降伏に外ならなかった。その後はソ連軍の監視下に入り彼らの命令のままに行動するより仕方がなかった。

昭和二十年九月二日すべての武器をソ連軍に渡してからの我々は、それでも「我々は捕虜になったのでは

ない、これから日本に帰って祖国の復興に参加するのだ」と本気で思っていた。しかし現実はその甘いものではないことを冷然と悟らされた。

九月二十日、周囲をソ連兵の銃に囲まれて、衣類と食料を持てる限り携え、ハルビンを後に牡丹江に向かい出発した。彼らの我々に対する扱いは必要以上に厳しいものに思えた。にもかかわらず、表向きは通訳を通じて「いま日本は非常に困っている。東京は焼け野原になっており、あなたたちの帰るのを待っている。これから牡丹江まで行き、そこから列車で朝鮮の元山に出て船で日本に帰る」と言う。しかしそれは我々の逃亡を警戒した嘘だったことが後で分かった。しかし我々は日本に帰れると信じてただ黙々と歩いた。どんなに疲れてもとにかく帰れると思つて歩いた。集団から離れるとたちまち敵意を持った住民たちから襲撃される恐れがあった。四面皆敵地なのだ。ここで落伍するとは死ぬことであった。崩れようとする気持ちに鞭打つて歩き続けた。持ってきた食料は次第に残り少なくなり、ほとんどの人は食い尽くしてしまった。後は携行

した衣類を近寄ってくる満人農夫と食物に交換して食いつないだ。

みんな疲労は極限に近く日増しに落伍者は増えていった。歩きながら考える、ここはどこだろう、もう牡丹江に近い山岳地帯に入っているようだ。仲間と話す元気もない。あちこちの山中から銃声が聞こえる。まだ戦闘を続けている戦友たちがいるのだ。ソ連兵の銃に囲まれ丸腰の我々には、この戦友たちに終戦の連絡の方法は何もない。この地帯では激戦のあとがまだ生々しく、ときどき戦死した戦友の死臭が暑い風に乗って鼻をつく。遺体の収容もできぬまま強い大陸の日差しで腐敗してしまっているのだろう。見えぬ遺体に心で手を合わせ通り過ぎるより仕方がなかった。最も悲惨だったのは当時国策として満州に入植した満蒙開拓団の家族たちであろう。ソ連軍に追われ、敵意を持った住民に襲撃され、全員白決して果てた集団もいたという。山越えの山中で明らかに暴行を受けた後殺害されたと見られる日本人女性の半裸の遺体を見た。ソ連兵の銃に遮られてそのまま通過せざるを得なかった。何

とも情けなく悔しい心情だった。

ようやく牡丹江の手前の駅海林に着いた。ぐったりとして疲れきった体を投げ出して寝ころんだまま脳裏に浮かんだのは、昨日まで一緒に一生懸命歩いていた親子のこと……、手を貸すこともできなかったが無事にたどり着いただろうか。しかし、よくも歩いたものだ。今日は十月五日だ。何とハルビンを出てから十五日も歩いたことになる。「ダワイダワイ」と無情なソ連兵の銃に追い立てられ、忘れようとしても忘れられない十五日間の荒野の死の行軍だった。どんなに疲れでも落伍すると死が待っている。疲労困憊の極限の中でその事だけが頭にこびりついていて、無意識に両足の筋肉を動かしていた。しかし、ついに海林に着いた、もう少して列車に乗れるだろう。あの山中で犠牲になった戦友たち、一緒に必死になって歩いていたあの母と子供たちはどうなったであろうか。苦しさに負けてしまいそうなの自分の気持ちを引き締めることだけで精一杯であったが、頭の中には行軍中のもろもろの事が次々によみがえってくる。しかしこれで何とか帰れるのだ。

私は疑問を持ちながらも、この時点ではまだ祖国に帰れると思っていた。

昭和二十年九月二十日ハルビンを出発して苦難の行軍の末、十五日目の十月五日ようやくどり着いた海林で、我々は千人単位の集団に編成されて列車に乗せられた。「あなたたちはここから朝鮮の元山港に出て日本に帰る」というソ連側通訳のまことしやかな言葉を信じて、我々はその夜海林を出発した。ところが海林から朝鮮の元山港へ向かうはずの列車（貨車）は南へ走らず、東に向かって走っていることに翌々日になって皆気づいた。不審に思って皆で通訳に聞いたですと今度は、「いま元山は港が混んでいるのでシベリア鉄道からウラジオストクに出て、そこから日本に帰る」と言う。しかしもう信用できなくなっていた。ソ連は我々を日本に帰すつもりはないのではないかと思い始めていた。

案の定貨車はシベリア鉄道に出てもウラジオストクの方向南へ走らず、北へ向かって走っていた。北はハバロフスクの方向である。こうなってはもう日本に

帰ることはあきらめざるを得なかった。だまされだまされついにハバロフスクまで来てしまっていた。この頃には我々の乗せられた貨車には外から鍵がかけられ自由に外へ出られなくなっていた。戦いに敗れて捕われの身となっている我々の考えが甘かったのだ。極寒の十一月である。貨車の中央に煉瓦を敷き、その上に石油缶を乗せ、それで薪を燃して暖をとるようにしていた。皆煤で顔がどす黒くなってしまった。貨車は我々の逃亡を警戒してか昼は駅に止まって走らず夜になると走った。我々は昼間の停車中に一斉にあちこちで大小の生理的排泄を行い、また食事づくりが仕事になった。配給のわずかなグリーンピースあるいは大豆を飯盒で丹念に煮て、これもわずかに配給になる岩塩で味をつけ、中身より塩湯の方が多し食事で腹を何とか満たした。

我々はこの極寒の地シベリアから日本には帰れないとあきらめて、逃亡など考える者は誰もいなかったが、ソ連兵は昼間厳しい監視をしていた。それは連合軍の将兵が最も恐れた勇猛な日本軍の斬り込み隊のイメー

ジを恐れることであろう。それにしても我々が彼らソ連兵と最初に接してあせんとさせられた事は、「日本に自動車はあるか、日本にラジオはあるか」、その次に腕時計を見るとダワイ（よこせ）と取り上げて一人で二つも三つも腕につけ得々としていたことである。ところが時計の見方を分かっている兵士はほとんどいなかった。こんな兵隊に敗れて今捕らわれの身であることの無念さが胸を突く。しかし悔いるものはない、する事はしたのだ。

貨車はさらに西に走り我々は全員イズベストコーワヤで降ろされた。そこから我々は見渡す限り銀世界の荒野を、さらに北へ北へとソ連兵のマンドリン銃で小突かれ小突かれ「ダワイダワイ」と追いつて立てられていった。飢えと寒さにさいなまれ昼夜の別なく歩かされた行進よりも、さらに苛酷な雪中行軍であった。日本軍が緒戦優勢のころ、フィリピン戦線において米軍捕虜を歩かせたと言われ、非難された「バターン半島死の行進」。私はこれを事実とは思わないが、我々に科せられた行進こそまさに死の行進であった。敗戦国の軍

隊の惨めさを骨の髄まで知らされた。海林を出発するとき千人単位で編成されていた作業隊員は、全員疲労の極限にきており、落伍者は増えるばかりであった。

この地域までくるとシベリア狼の群が数多くうろついていた。夜行性の狼の群はときには牛や馬をも襲うどう猛な獣で、もし行軍中落伍すればその餌食となるおそれがあった。今もあのとき落伍していった人たちのことを思うと、身も凍る恐ろしさと悲しさがこみ上げてくる。途中の囚人収容所跡の建物に行きついた所が食事場所であり、その日のねぐらとなった。その建物に行きつかなければ、いつまでも歩かされた。この頃の食料はトウモロコシの粉を煮てこれを練ったものを食わされた。寒くても暖をとる方法はなく寝られたものではなかった。

苦難の年の暮れ昭和二十年十二月二日、我々は最初の収容所テルマに着いた。このとき皆体力を消耗しきっていてペーチカの薪を拾いに行くのがやっとだった。ソ連側もこんな状態は承知していて、しばらくは作業をさせなかった。ここで食わされたのはかつての関東

軍の軍馬の飼料だった。皮かぶりのコウリヤン、カチカチに乾燥したトウモロコシなどで、どんなに煮ても軟らかくならなかった。しかも給付されるのはほんの一握りの量であった。わずかな岩塩で味をつけ塩湯に近いものをスープと称して腹に流し込んだ。しかしそれは食後しばらくすると皆小便になって出てしまい、いつも腹は空っぽだった。皆食べ物の話をするのが楽しみで食い物にありつくのが第二の仕事であった。ソ連側は我々の体力が少しずつ回復するのを見て燃料運搬、家屋修理、伐採、木材搬出、製材など、しだいに労働は重度になっていった。私も伐採をやらされたがシューバーを着ての作業は重労働だった。

翌年私はここからさらに奥地のモシカに送られた。それは、ここに製材所が開設され、枕木の製作が行われることになり、伐採、搬出、製材の要員としてであった。それぞれに三種類の労働を割り当てられノルマを課された。ところが私は召集前大学工学部に籍があった事が知れたのか、マシーニスト（エンジニア）という事で、製材所の機械工として配置された。しかし

仕事はエンジニアが笑い出す単純な仕事だった。丸鋸のシャフトの軸受（ベアリング）の加熱を防ぐため、そこに詰まるおがくずを取り除き、ベアリングを洗浄、グリスを給油する仕事。一日に何回となく切れてしまう丸鋸回転のための蒸気タービン動力伝導ベルトの緊急接続修理の仕事。また丸鋸の前を矢のように何回となく往復する原木保持機の伝導ワイヤがたびたび切断してしまふので、その交換修理の仕事など、次々起る突発的故障を迅速に修理して、製材ノルマに影響させないようにするのが私の責任だった。他の製材所要員たちは故障が起れば故障が直るまで休めるので喜ぶが、私は故障が起れば一分でも早く直さなければならなかった。零下五十度の酷寒の中でときには素手で修理する事は大変な仕事であった。

しかしこの酷寒の中で他の作業もまた非常に厳しいものであった。伐採の仕事に当たった戦友達は、二人引き鋸で、重い防寒外套を着ての雪中の作業、ノルマは厳しく、ときには防寒外套のため機敏に行動できず、倒木を避けきれず下敷きになり、命を落とした人もい

た。また、搬出に当たった者は、数本の木材を鎖でゆわき、馬に引かせ道なき山中を下りるとき転落して材木に押し潰され無念の死に至った人もいた。こんな重労働をしながらの食事が干からびたトウモロコシや皮かぶりのコウリヤンでは、弱りきった胃が消化できるはずがなく、皆ひどい下痢に苦しめられた。

激しい下痢の結果極端な栄養失調になっていった戦友たちは次々に死んでいった。グッタリと疲れて誰もが何とかなして生きることだけを考えながら眠った。人間は生と死の境では死よりもいかに生きるかを考えるものだ。私はつくづくとそれを思った。しかし生きる希望を失って首を吊り自ら命を断つ人もいた。突然夜中に起き上がり「ほら、船が来ているじゃないか、早く行かないと乗り遅れるぞ」と叫んで酷寒の戸外へはだして飛び出した戦友がいた。彼は肉体的な苦痛、希望もない精神的な苦痛に耐えきれず苦悶のすえ発狂してしまったと思われるが、その後間もなく死んだ。シベリアは六月末になると、日本の梅雨に似た雨がしとしとと毎日降った。この時期はそれまですべて氷

結していた川の水が一齐にとけ出し、雨水と重なって道路という道路は水に浸り昨日までの雪原は泥沼と化し、交通は完全に途絶した。そのためシベリア鉄道沿線から輸送されてくる食料はパツタリ止まって、収容所は陸の孤島となってしまうのが常だった。十日二十日と過ぎるとやがて食うものは何もなくなくなってしまった。わずかに生えてくる草は手当たりしだいに食った。馬糞を拾って丹念にお湯で洗い流し、中から出てくる消化していかない麦を根気よく集め、これを空き缶で炒って食べた。早く草が生えて欲しい、そうすれば草が食える。木の芽が出て欲しい、そうすれば木の芽が食える。昨日の朝は右隣に寝ていた仲間が死んだ、今朝は左隣の友が死んだ。いったいあと何日生きていられるだろうか。今にしてみれば死ぬことはたやすいことだ、生きようとすることの方がどんなにか辛い。

シベリアの夏は短い。九月半ばにはもう白銀の世界になる。冬のシベリアの夜はよく澄んで月が皓々と輝いていた。照る月を仰ぎながら私は思った。私はまだ生きている、我ながら己の生命力と宿命に驚く。人間

がこんな境涯に陥ったとき、生と死の境は自らの生きることをあきらめぬ精神力だけだと思った。西行は「嘆けとて月やは物を思はする……」と詠ったが、私は皓々と照る月を幾度か眺めながら、「年老いた父母はどうしているだろうか、また共にこの戦争に出陣した兄はどうなったか、故郷に残った弟妹達はどうしているだろうか。戦争に敗れた日本では皆無事であろうか。「国破れて山河あり」、国情がどのように変わろうとも、緑濃い山も、水清い川も、変わるまい。もの言いたげな月の光は、今日も故郷のあの山を、また、あの川を照らしているであろうに」と思いは尽きなかった。私は月に祈った。「まだ元気でいてくれるなら、年老いた父母に必ず伝えて欲しい、私はまだ生きていて、しかし無念だが肉親と同胞の幸せ祈りながらやがて凍土の土になるだろう」と。

収容所の二段ベッドの上と下では熱帯と寒帯の違いがあった。部屋の真ん中で焚く大きなベーチカで暖められた空気は天井に上ってしまい、逆に冷えきった地面の冷気が部屋の床板を凍らせ、下段ベッド周辺の空

気を冷やしてしまうからだ。上段ベッドでは暖かく寝られるが、下段ベッドでは毛布を何枚重ねても寒くて寝られたものではなかった。部屋の中でありながら、床板に接した空気が、冷えた地面に冷やされて床板に薄い氷が張っていた。皆上段ベッドへ上がってしまい、下段ベッドに寝る者はいなかった。

冬は六月の雨期のように今度は雪のために食料輸送のトラックが止まってしまい食料が途絶えた。おまけに冬は草も木の芽もないので、いつも二十日程輸送が止まると完全に食料はなくなった。シベリアエゾ松の幹にはりついているコケを食った。エゾ松の幹を食って冬を越しているカミキリムシの幼虫をとり、これを串にさして焼いて食った。これは何よりごちそうだった。ビスケットの味がすると思った。こうして生き残った私は、どんな苦難に遭っても耐え抜くことができるという自信を持ったものだ。

昭和二十三年六月、私はモシカの収容所で突然発熱と共に激しい下痢に襲われ血便が出た。ソ連軍医師は私を「赤痢」と診断したものと思われる。伝染を恐れ

てか、私を急きよテルマに送り病院に入院させた。ところが幸運にもこのとき、この病院の入院患者の帰国（ダモイ）の検査が行われた。そして何と私はこの検査で帰国者の中に入れられたのである。おそらくこの病院でも私を赤痢と診断し帰国に入れたのであろう。しかし私は入院後数日で下痢も血便も止まってしまった。今思えば赤痢ではなく大腸炎か何かではなかっただろうか。従って私は帰国を取り消され、また奥地へ送り返されるものと覚悟していた。けれども帰国は取り消されなかった。もし帰国検査があと一週間遅かったら、恐らく私はまたモシカに送り返されてさらに帰国は二、三年遅れるか、あるいは二度と故国の土を踏めなかったかも知れない。運命の不思議さを痛感せずにはいられない。幸運に感謝しながら、出港地ナホトカへ向かつての出発が待ち遠しかった。

六月も半ばを過ぎた頃ようやく出発できた。七月初めいよいよナホトカに着いた。しかしここにはすでに到着している帰国予定者が、収容所に入りきれずにあふれていた。我々はその間に簡単な作業に駆り出され

たが、船が着いたとき作業に出ていて乗船に間に合わず後回しにされた人もいたと聞いた。後回しにされはしまいかと、作業中も気が気ではなかった。約一カ月半待たされ、昭和二十三年八月、とても生きては帰れまいと思っていたのに、終戦三年目によく帰国できることになった。しかし乗船し船が出帆するまでは安心できなかった。引揚船上から遠ざかるシベリア大陸に怨みのまなざしを送り、「さらば地獄のシベリアよ」と万感を胸に大陸に背を向けた。やがて東方洋上に夢に見た故国日本の陸地を見てはじめて「ああ、日本に帰れた」と思えた。運命に翻弄されて過ぎた六年の歲月、それは生涯忘れることはできない。それより何よりも共に苦しみながら不運にもこの日を迎えられずさみしく凍土に消えた仲間と、いまだ捕らわれて自由を得られぬ仲間のことを思うと胸が痛む。

感激の日本の土を踏んだ。やわらかい祖国の土だ。親兄弟に早く会いたい。舞鶴上陸後の色々な手続の終了が待ち遠しかった。しかし間もなく自由の身になれると思うと、気持ちがあ宙にあるようだった。舞鶴から

上野まで列車に揺られながら、六年前、決戦を叫んで貨車に乗せられ、軍事秘密のためどこへ行くかも知られず、灯火をつけることもできず、暗闇の中を完全武装で黙々とこの東海道線を旅立ったあの日が思い出された。それにしても帰国上陸したときの日本の女性があまりにも美しくあまりにも艶やかに見えた。灰色の世界から突然龍宮に來た感じであった。シベリアでは「日本には今餓死者が裏道に放置されている」とあれほど宣伝教育され吹き込まれていたのに、この女性たちはきれいな服装をしているが食べるものはあるのだろうかと非常に戸惑った。そして我々がいかに隔絶された世界に置かれていたか、だんだんに気づいてきた。今になって初めて日本の時流が分かったのであった。車中シベリアにおける過ぎし日のことが走馬灯のように、浮かんでは消え浮かんでは消えているうちに、列車は上野駅に着いた。私はまず辛うじて憶えていた五日市の従兄の家に電話をした。すでに死んでしまったと思っていた人間からの突然の電話で従兄は仰天し何度も何度も念を押していた。生家の肉親たちも皆元

氣だという。私は胸を躍らせて、上野から立川に出て五日市に向かった。田舎の電車の沿線の緑は思い出す六年前と少しも変わっていないかった。

五日市駅には故郷の檜原から一族みんなが出迎えてくれた。駅から車を連ねて檜原の私の生まれ育った家に向かった。二度と見ることはできないと思っていた山や川も変わらぬ姿で私を迎えてくれた。懐かしの我が家に着き、玄関を入ると母親が座って待っていた。

「お母さん帰りました」私は声をかけた。しかし母親は何も言わず、いや言えなかつたのだろう、あとからあとから流れ出る涙を拭いもせず、顔中をクシャクシャにしてただ黙って私の体を一生懸命撫でていた。私もじっとして撫でるに任せた。「お母さん気の済むまで撫でてくれ、死んだと思った我が子が生きて帰ったのだから」。聞けば母親は私のために毎日陰膳を供える事を欠かさなかつたという。あまりにも長かつた私のシベリア抑留の間に、すでに父親もすぐ上の兄もこの世の人ではなかつた。思えば私が電信第一連隊に入隊したとき、営門まで見送ってくれたのも父とこの兄で

あった。目をつむるとあの日の二人の姿が彷彿として浮かんできくる。万感胸に迫って私はしばし時の移るのを知らなかった。私は時の流れを三年無為に終わらせてしまった腹立たしさを感じた。衰えた体力の回復に専心しながら、とり残されてしまった自分の現代感覚の追及に苦心し容易でないことを感じた。

思いもよらぬ虜囚の生活を送り、地獄にも似た生死の境では、人間は教養も体裁もなくなることを知った。本能のままにただ生きることだけしか頭になくなる。

煩惱のなせる業かこれが仏教語でいう餓鬼道なのだろうか。いつ死んでも不思議でない状況の中で生き延びた。これは苦しみに耐え抜いた精神力だけでない幸運にあると、生還した戦友たちはみなそう思っているに違いない。何か不思議な大きな力を思う。それにしても、あれ程に夢見た帰国を不幸にして果たすことなく異国に果てた戦友を思うと、限りなく胸が痛む。英霊たちよ、日本は戦いに敗れたが、平和国家として立ち直っている。安らかに眠って欲しい。そして祖国の発展を見守って欲しい。

【執筆者の紹介】

住 所 立川市栄町三一五六―一七

生年月日 大正十年八月二十一日

全抑協立川支部員として古くよりシベリア抑留者の諸運動などに参加して多大な業績を残され、現在でも支部として重要な人物です。

(東京都 石川 祐常)

開戦より復員までの記

新潟県 真 嶋 藤 作

開 戦

どんよりとした雲が今にも落ちて来るかと思わせる、はつきりしない天気であった。

満州はそれまで、避難地ぐらいに思われていたし、平穏な楽土としか感じられない別天地であったと思われた。ところが八月七日、突如寝耳に水の大音響を伴